

指導者のソーシャル・サポートが選手に抱かせる信頼感に与える影響
—アーチェリー選手を対象にして—
The relationship between coach's social support and player's trust
—Intend for archery player—

1K07A046-8

指導教員 主査 中村好男先生

岡村静香

副査 奥野景介先生

【目的】

競技会という限られた時間と空間で新たな記録へ挑戦する「競技スポーツ」において、指導者が行うサポートは、最高のパフォーマンスを引き出すために必要不可欠なものである。これまでの研究でもサポートを行うことの重要性は示唆されているが(大嶽・古賀ら, 2002 他)、指導者が選手に対し有効なサポートを行ったとしても、指導者と選手との間に信頼感が無くてはそのサポートは競技において 100% の効果をあげるとはいえない。また、他者へのサポートの形には様々なものが存在するが、中でも信頼感を高める重要な要素の一つとしてソーシャル・サポートが挙げられる(天貝, 2001)。特定の他者に対する信頼感とソーシャル・サポートの関連は既に明らかになっているが、指導者の行うソーシャル・サポートと、選手が抱く信頼感について注目した研究は少ない。また、ソーシャル・サポートの実施と、信頼感の獲得の重要性が指摘されている中で、大学アーチェリー部活動においては指導者によるサポートが不十分であり、信頼感の獲得は難しい現状から、本研究は指導者によるソーシャル・サポートと選手が抱く信頼感との関連を明らかにすることを目的とし、その結果をもとに指導者が実施すべきサポート内容及び行動を検討した。

【方法】

2010 年 10 月中旬～11 月初頭にかけて、関東学生アーチェリー連盟に加盟しており、なおかつ 2010 年度当連盟リーグ戦において 1 部リーグに所属していた関東六大学のアーチェリー部員を対象としてアンケート調査を実施した。

調査参加にあたり、研究についての説明を行い、本調査に対する理解を得た者のみ回答するように指示した。調査内容は(1)フェイスシート(2)ASSS 尺度によるソーシャル・サポート調査(3)STT 尺度による信頼感調査である。統計処理には、SPSS (Version. 17.0) を使用した。

【結果】

ASSS 尺度・STT 尺度各下位尺度得点の基本統計量と指導期間差・性差を算出した。指導期間差はアンケート対象者が指導を受けた年月の平均値が 1.73 年であることから、1.7 年(≒21 カ月)を基準として指導期間長期群と短期群に分類し、

性差と共に各下位尺度得点についての t 検定を用いて検討を行った結果、指導期間差については指導サポートにおいて長期間群よりも短期群の方が有意に高い点数を示した。男女差については、親愛サポート・娯楽サポート・指導サポート・安心感において男性よりも女性の方が有意に高い点数を示した。続いて ASSS 尺度と STT 尺度との関連を検討するために各項目の下位尺度得点間相関を算出した結果、ASSS 尺度と STT 尺度の各項目間において互いに優位な相関を示した。また、ソーシャル・サポート満足度信頼感との関連を表す散布図を作成した結果、ソーシャル・サポート満足度と指導者に対する安心・正当性といった信頼のポジティブな側面との関係は正の相関があり、また不信といったネガティブな側面との関係は負の相関があることが示された。

【考察】

本研究の結果から、指導者のソーシャル・サポートは選手が抱く信頼感に影響を与えることが明らかになった。指導者はただ長期にわたりサポートを行う事が必要なのではなく、自分の選手をよく観察することに加え、選手とコミュニケーションをとる事で情報を共有し、選手自身が何を考え、本当に必要としているサポートが何かを考慮し、実施することが重要であると考えられる。加えてアーチェリーの競技特性を考慮すると、指導者が実施すべきサポート内容及び行動とは、

- ・選手の現在の競技レベルに相応し、なおかつ選手が必要としている指導サポート

- ・またそれだけに止まらず、選手の性格や立場を理解し激励する、選手の一人として尊重されているといった自己認知に働きかける、時に競技力の停滞から競技へ固執してしまった、また固執してしまう恐れのある選手へのストレス低下を促すなど情動的・娯楽的サポート

を臨機応変に実施することだと主張する。そして指導者が選手の満足するサポートを実現できれば、指導者への信頼感も高まり、選手の競技力向上のつながる可能性も考えられる。今回の研究では「指導者の性別による信頼感の差」、「指導者-選手感における信頼感尺度作成の必要性」、が今後の課題として挙げられたため、以上 2 点を考慮しながら、ソーシャル・サポートと信頼感との関連を検討していく必要がある。